



大衆芸能や、男性を巻き込んで 性的暴力撲滅への ユニークな道



マリカ・ダット

Mallika Dutt

反性的暴力団体 Breakthrough 主宰

インドからアメリカ東海岸の名門女子大に留学したマリカ・ダット氏が、キャンパスで目撃したのは、遊びに来たアイビリーグの男子学生たちによる性暴力。この経験はインドとアメリカを股に掛ける、女性の性被害防止活動に取り組みきっかけになった。彼女はやがてポリウッドの映画産業を動かし、男子大学生をも巻き込んだ画期的な活動を育て上げた。

キャンパスで起きる性暴力

MA ダットさんはインド出身ですね。

ダット コルカタ（旧カルカッタ）で子ども時代のほとんどを過ごしました。家庭は上流中産階級で、両親、兄弟、祖父母、叔父、叔母、いとこが暮らす大家族です。父はパキスタン出身で、第1次印パ戦争（1947〜49年、イギリスからの独立の際、カシミール地方の領有をめぐってインド・パキスタン間で起きた戦争）のころ、家族でインドに移りました。祖父は、インドでカーペットの輸出業を始め、それを父が継ぎました。家にはアメリカやヨーロッパのモダン・アート作品があり、私はアートの大いに親しんで育ちました。その後、デヘラードウーンにあるウエルハム・ガールズ・スクールという、イギリス人女性がつくった寄宿学校で学び、80年に18歳で、アメリカの大学に入りました。

MA 当時、アメリカに留学するインドの女性は珍しかったのではないですか。

ダット そうですね。兄が2人、弟が1人いますが、彼らが家業を継ぎ、私は結婚して家を出て行くのだからと皆、考えていました。でも私は小さいころからいつも自分の権利を主張してきていたので、こんな慣習を破る覚悟はいつでもありました。たまたま友人姉妹がアメリカのウエルズリー・カレッジに行っていて、休みに家に遊びに来ては、大学での勉強がどれほど素晴らしいか、話してくれました。

MA マサチューセッツ州にある、ヒラリー・クリントンが通った名門大学ですね。

ダット そうです。話を聞くたびに、アメリカの大学で学びたいと思う気持ちが強まり、アメリカ北東部の名門女子大群、セブンシスターズの一つ、マウ



ントホリヨーク・カレッジに入学しました。奨学金の額が最も多かったからです。

MA 最難関の女子大の一つですね。

ダット その後、ニューヨークにあるコロンビア大学大学院で国際関係論の分野で修士号を取得し、さらにニューヨーク大学ロースクールで、弁護士の資格も得ました。

MA 女性に対する暴力に関心を持ったきっかけは何ですか。

ダット 大学で目の当たりにしたからです。週末になるとダートマス大学（名門大学アイビーリーグの一つ）の男子学生の友愛クラブであるフラタニティから男子学生が、われわれの大学に遊びに来ていました。そこでいつも女子学生が性的暴行を受けたり、強姦されたりしていました。非常に危険な環境でした。後年、インドでも女性が直面するさまざまな問題を考える女性センターに関わりましたが、そもそも女性に対する暴力の問題に挑むことになったのは、マウントホリヨーク・カレッジでの体験がターニングポイントでした。

MA 具体的には何をしたのでしょうか。

ダット ロースクール時代、SAKHIという組織を立ち上げました。ヒンディー語で「女性の友人」という意味です。家庭で男性から暴力を受けている、南アジア出身の女性を助けるためでした。状況は深刻で、ほとんどの女性は移民になったばかり。英語を話せず、警察に連絡することも恐れていたのです。SAKHIはあくまでもボランティアで運営しました。私は司法試験に合格後、デベヴォイスという大手法律事務所働いていました。事務所は弁護士をたくさん抱えていたので、無料奉仕で手伝ってくれる弁護士のネットワークをつくり、助けを求めてくる女性たちのために立ち上がったのです。

その事務所では主に、アスベストによる健康被害問題を扱っていましたが、つらい仕事で最終的に事務所を離れました。その

数カ月後、アメリカ全土で公民権活動に取り組んでいるノーマン財団に入りました。全国に足を運んで、司法制度はどのように機能しているかを見て歩きました。アフリカ系アメリカ人が直面している人種差別、死刑制度が適用される場合の白人と有色人種に対するダブルスタンダードなど、多くのことを学びました。公民権とは何か、深く理解する素晴らしい機会でした。

人権問題は、他国の問題ではなく、アメリカにも根強く残っていることを目の当たりにし、私は心揺さぶられました。

MA フォード財団にも在籍しましたね。
ダット 96年、インドの首都デリーにあるフォード財団支部に移り、人権問題を担当することになりました。インドだけでなくスリランカやネパールもカバーしました。

人権問題と大衆文化の出会い

MA 最初に何をしたのでですか。
ダット 活動を女性問題だけでなく、警察の改革、ダリット（カースト制度外に置かれている被差別民）・コミュニティーや土着の部族が直面している差別の軽減に広げました。ダリットへの差別は法律



女性への暴力と戦う団体Breakthroughが今最も力を入れているのが、「ヘルを鳴らせ」というキャンペーン。暴力行為の音が聞こえたら、その家のベルを押すという活動。メディアを多角的にを使って広報している。ストリートシアターも人気で、学生を含め多くの男女が見に来て来る



人権問題は、他国の問題ではなく、アメリカにも根強く残っています。





整備で改善されましたが、現実には残っています。

また、私はそれまで15年も人権問題に取り組みましたが、われわれが使う方法論や言葉はいつも同じような500人を対象に巡っているだけでないかと感じていました。もっと広くアピールするための効果的な方法を考えたいと思ったのです。そこで所長から許可をもらい、インドの大衆文化であるポリウッド（インド映画産業）とその音楽について徹底的に調査しました。当時インドではCDというメディアが普及し始めたところで、私はインドのポップアルバムを片っ端から聴きました。インドの国民的歌手、シユバー・ムドガルのCDを聴いた時、これだと確信しました。作曲家、音楽ディレクターなど、そのCDを作ったチームの一人ひとりに直接会って、女性に対する暴力を防止するためのプロジェクトでコラボをしないかと話を持ち掛けました。

MA 説得はうまくいきましたか。

ダット メンバーの説得はできて、その後資金調達で苦戦しました。レコード・レーベル社ごとに足を運び、最終的にヴァージン・レコードが引き受けてくれましたが、もしここがダメだったら、自分たちで巨額のお金を捻出しなければならず、悪夢そのものになっていでしょう。2000年にインドの女性問題をテーマにした、ミュージックビデオとミュージックアルバムが完成し、インドのヒットチャートのベスト10に入りました。マルチメディアと大衆文化のパワーは絶大です。エンターテインメント産業とパートナーシップを結び、世間の注目を集め、人を刺激し、より簡単に人々を社会変革に向かわせることができます。

このミュージックビデオが大成功したことで、私は財団に残るか、独立して新しい組織をつくってさらに大きく自分の考えで活動するか、選択を迫られました。

ました。ロースクールでは、こうした分野は学んでおらず、独立にはリスクがありました。やるべき正しい行動であると感じました。そしてBreakthroughを立ち上げたのです。性的暴力をはじめとして、女性に対する暴力を防止することをテーマに活動するためです。

MA Breakthroughは、ニューヨークとデリーに拠点を置いていますか。

ダット 現在は女兒の早期の結婚、出生男女比の不均衡、DVとセクシュアルハラスメントなどの問題に関わっています。インドでは女兒の胎児の中絶がとて多く、それが人口の男女比を不均等にしていきます。その慣習を断つために私たちは介入しています。私たちが関わる課題の全てが、男女が交差するところに関係しています。それが活動の核です。女性に対する暴力を犯すのは男性ですが、私たちの活動の特徴は、その防止に男性を使うことです。

MA 男性からの反発に遭いませんか。

ダット ミュージックビデオと一緒に作ったのは、作曲家もプロデューサーもみんな男性でした。当時でさえ、女性の問題になぜ男性とコラボしたのか、と周囲から反発されました。しかし女性への暴力は、女性だけの問題ではないと思います。むしろ、変わらなければならないのは男性側です。

私たちはこの考えを携えて、世界三大広告代理店の一つであるオグルヴィ・アンド・メイザーに協力を求めたところ、快諾してくれて、無料の驚くべきキャンペーン、Bell Biao（ベルを鳴らせ）という意味）を立ち上げてくれました。

男性を加害者としてのみ見るのではなく、解決策の担い手として参加させるのです。これが今われわれがやっているキャンペーンのベースになっています。私たちは、暴行を受けた女性の救済も考えています。

プログラムに参加した かなりの男子学生が 女性の気持ち 大事にするようになります。

起きている性的暴力の問題に取り組んでいます。先ほどダートマス大学のフラタニティーの男子学生の性的暴力の問題に触れましたが、まずフラタニティーの男子学生を集めて教育しています。男子学生はデートしたらセックスをするものだと考えがちです。それを女性が拒否すると力づくでセックスしようとする。それは性的暴行です。まず、その事実を認識してもらいます。その上で、女性を性的な対象としてだけ見るのではなく、デートの時にどうしたらお互いにリスペクトすることができるのか、考えてもらうのです。

女性がどういう気持ちで男性とデートするのか、性的なものも含め男性から暴力を受けた女性はどれくらい傷つくのか、そのトラウマから立ち直るためにどれくらい呻吟するの。そうしたことを男性は知りません。このプログラムに参加すると、かなり多くの男子学生が女性の気持ちを大事にするようになります。それが女性への暴力を減らすことにつながります。

MA どんな反応がありましたか。

ダット インディアナ大学2年生の19歳の学生、ウィル・マックエルヘイニーは、入学して間もなく、大学の新聞でキャンパスで起きた性的暴行事件の記事を目にしました。ちょうどその時、私たちの組織、Breakthroughは、男子学生への運動を始めたばかりで、MARS (Men Against Rape and Sexual Assault) 強姦及び性的暴行に反対する男性」という組織を立ち上げたばかりでした。彼はすぐにそのメンバーになり、他のメンバーと団結して活動を始めました。フラタニティーの友人やその他のリーダーに声を掛けて、いわゆるレッド・ゾーン期間（大学が始まる最初の週からサンクスギビングまでの、女子学生に対する性的暴行が最も頻りに起こる期間）

ますが、重点的に取り組んでいるのは防止へのアプローチなんです。

男性が向き合う性暴力

MA 男性側を教育するのは至難の業だと思えますが、具体的には何をやるのでしょうか。

ダット 今ニューヨークでは、大学のキャンパスで性的暴行に反対するスローガンを書いた特大の横断幕をキャンパス内に掲げて、バナリアップキャンペーンを行いました。実際に暴行が起きた時には、彼はそのフラタニティーのリーダーに連絡して緊急会合を開きました。

リーダーたちは、その後、ソーシャルメディアを使ったキャンペーンを続けています。ウィル自身、「この活動で、男性であるとはどういうことか、真剣に考えるようになった。他の男子学生にもそうした考えを広めていきたい」と言っています。

MA 他に考えている戦略は何ですか。

ダット ご存じのようにアメリカには大学の格付けがあります。スポーツのトップ10、科学のトップ10というように分野別に格付けされています。その格付けエージェンシーと組んで、キャンパスの安全度のトップ10という格付けをしようとしています。うまくいけば、安全度の格付けが公表されるので、各大学にプレッシャーを与えることになり、大学全体でこの深刻な問題に取り組むことにつながると思います。男性側の意識を変えるには時間がかかります。しかし効果は大きいと考えています。



ダット氏は精神的に講演活動を続けている。2010年にはクリントン・グローバル・イニシアティブ国際会議における全体会合「女兒・女性のための平等」に参加し、講演した



マリカ・ダット

1962年、インド・コルカタ生まれ。インド北部のウェルハム・ガールズ・スクールを卒業後、アメリカ東海岸、マウントホリヨーク・カレッジで学ぶ。コロンビア大学大学院で国際関係論の分野で修士号を取得。ニューヨーク大学ロースクール弁護士免許取得。弁護士事務所勤務の後、ノーマン財団、フォード財団を経て、女性への暴力と戦う人権団体、Breakthroughを立ち上げる。ポリウッドのスターを起用したミュージックビデオのキャンペーンで話題になる。アメリカの大学キャンパスでも学生を巻き込んで活動中。